

文 登		
數冊	號冊	號冊
五	一	
二		
學校	縣中	滋賀

五

寸半指者中也其命與於五據立據外據之

關外據之上據者之前也
 是物之度象在脈外謂者中比在公
 原錄云之度
 所出於象片之

指之少指即第四指之總為
 流於彼處在是少指次指也
 三指多注半臨位去後象上行一寸半即本指後隔者
 中為命不
 過於直據其及外據之

寸半

東經

卷十一

710.42
89
Vol 50

新刊吾妻鏡卷第五十一

弘長三年癸亥

正月小

一日 壬午陰

境飯

相別釋室御沙汰相別以下

著布衣出仕如常申時刻之後各降庭上座列

左馬權頭時宗

相摸四郎宗政

武藏前司朝直

尾張前司時章

越前々同時廣

相摸三郎時輔

同七郎宗頼

遠江前司

相摸左近大夫將監時村

遠江右馬助清時

中務大輔教時

民部權大輔時隆

尾張左近大夫將監公時

尾張左近大夫將監公時

陸興左近大夫將監義宗 刑部少輔時基
武藏式部大輔時房 彈正少弼業時

越後四郎顯時 武藏五郎時忠

陸興十郎忠時 駿河四郎兼時

武藏八郎頼直 駿河五郎通時

備前太郎宗長 遠江四郎政房

武藏九郎朝貞 宮内權大輔時秀

那波刑部權少輔政茂 秋田城介

和泉前司 佐々木壹岐前司

武藤少卿 後藤壹岐前司

小山出羽前司 縫殿頭

越中前司 長門前司

日向前司 加賀前司

佐々木對馬守 中務權少輔

宇都宮右見前司 畠山上野三郎

木工權頭 駿河右近大夫

能登藏人 美作左衛門大夫

那波五郎 城四郎左衛門尉

佐渡新左衛門尉 上野三郎左衛門尉

城六郎兵衛尉 佐々木壹岐三郎左衛門尉

城弥九郎 越中次郎左衛門尉

後藤壹岐左衛門尉 越中五郎左衛門尉

長門三郎左衛門尉 信濃左衛門尉

越中六郎左衛門尉 後藤壹岐次郎左衛門尉

遠江三郎左衛門尉 大隅修理亮

筑前三郎左衛門尉 大隅大炊助

大曾林太郎 常陸左衛門尉

周防五郎左衛門尉 筑前五郎左衛門尉

梶原上野太郎左衛門尉 隱岐四郎兵衛尉

伊勢次郎左衛門尉 伊勢三郎左衛門尉

甲斐三郎左衛門尉 武石新左衛門尉

加藤左衛門尉 紀伊次郎左衛門尉

小野寺四郎左衛門尉 遠三郎左衛門尉

小野寺新左衛門尉 内藤肥後六郎左衛門尉

甲斐五郎左衛門尉 出羽八郎左衛門尉

佐々木孫四郎左衛門尉

伊賀四郎左衛門尉 伊賀野四郎左衛門尉

伊東八郎左衛門尉 備後太郎

信濃判官次郎左衛門尉

伊賀式部八郎左衛門尉 薩摩七郎左衛門尉

平賀三郎左衛門尉 備後次郎

周防七郎 備後三郎

天野肥後三郎左衛門尉 同肥後四郎左衛門尉

足立右衛門五郎 佐々木加地太郎左衛門尉

將軍家出御南面土御門大納言參進上御簾三箇

間及進物御劔武藏前司朝臣御調度中務大輔教

時御行騰香宮内權大輔時秀 一御馬 武藏五郎時直 足村三郎兵衛尉

二御馬 城六郎兵衛尉顯盛 同九郎長景

三御馬 出羽八郎左衛門尉行世 同九郎宗行

四御馬 佐々木壹岐三郎左衛門尉賴經

同四郎左衛門尉長經

五御馬 相摸三郎時輔 諏方四郎左衛門尉

未刻將軍宗 御行始入御相羽禪室亭 供奉人

御所御方

御叙役 同五郎時直

武藏前司朝直 同左近大夫將監公時

尾張前司時章 越前々司時廣

左馬權頭 刑部少輔時基

相摸三郎時輔

越後四郎顯時 陸奥十郎忠時

秋田城介泰盛 同九郎長景

和泉前司行方 佐々木壹岐前司

中務權少輔重教 越中前司賴業

後藤壹岐前司 日向前司祐泰

縫殿頭師連 美作左近藏人宗教

小野寺四郎左衛門尉 常陸左衛門尉

信濃左衛門尉 周防三郎左衛門尉

筑前三郎左衛門尉 進三郎左衛門尉

加藤左衛門尉 甲斐三郎左衛門尉

伊東八郎左衛門尉 將野四郎左衛門尉

佐々木對馬四郎左衛門尉 宗經

大見肥後四郎左衛門尉

中御所行方入葉御車
被出御衣

中務權大夫教時

相摸左近大夫將監

民部權大輔清時

武藏式部大夫

遠江左馬助清時

相摸七郎

刑部權少輔政茂

宮内權大輔時秀

長門前司

佐々木對馬前司民信

畠山上野三郎

大隅修理亮

城四郎左衛門尉

後藤壹歧前司

小野寺新左衛門尉

梶原太郎左衛門尉

伊勢次郎左衛門尉

武石新右衛門尉

信濃判官次郎左衛門尉

嶋津周防七郎定資

御引出物御尾張前司時章砂金左近大夫將監

時村羽 秋田城介泰盛

一御馬 相摸七郎宗頼 平新左衛門尉頼經

二御馬 筑前左衛門尉行實

二日 癸未天晴 坑飯相羽御沙汰 御簾土御門

大納言御鈕尾張前司時章御調度越前々司時廣

御行騰和泉前司行方

一御馬 相摸左近大夫將監時村

四方田新三郎左衛門尉

二御馬 越後四郎顯時 糟屋左衛門三郎行村

三御馬 城六郎兵衛尉顯盛 同九郎長景

四御馬 出羽八郎左衛門尉行世 同九郎宗行

五御馬 越後六郎實政 伊賀右衛門次郎

今日以元日出仕人數為鶴野御參供奉被下御沙

次 武州御沙 御簾土御門

三日 甲申天晴 境飯 武州御沙 御簾土御門

大納言御劔中務權大輔教時御調度左近大夫持

監公時御行騰太宰權少貳景賴

一御馬 相摸七郎宗賴

安東宮内左衛門尉景光

二御馬 梶原太郎左衛門尉景經 同五郎景方

三御馬 甲斐三郎左衛門尉為成

同五郎左衛門尉為定

四御馬 上野三郎左衛門尉重義

同左衛門五郎宗光

五御馬 陸奥十郎忠時 牧野太郎兵衛尉

五日 丙戌 鶴野御參供奉人事相催

七日 戊子天晴將軍家御參鶴野八幡宮供奉人

御車 城除九郎長景 出羽八郎左衛門尉

後藤壹政次郎左衛門尉

長門三郎左衛門尉 伊勢三郎左衛門尉

梶原三郎左衛門尉 嶋澤周防七郎

越中次郎左衛門尉 武石新左衛門尉

越中五郎左衛門尉 上野三郎左衛門尉

伊賀四郎左衛門尉 持野四郎左衛門尉

平賀三郎左衛門尉 薩摩七郎左衛門尉

佐渡新左衛門尉

信濃判官次郎左衛門尉行宗

以上十七人著直垂帶劔侍御車左右

次御後四十九人 布衣

武藏前司朝直 同式部大夫朝孝

同五郎時忠 同八郎賴直

越前々司時廣 中務權大輔教時

尾張左近大夫將監 相摸左近大夫將監

民部權大輔時隆 同四郎宗房

相摸三郎時輔 同七郎宗賴

刑部少輔時基 遠江右馬助清時

越後四郎顯時 陸奥十郎忠時

那波刑部少輔政茂 宮内權大輔時秀

佐々木壹岐前司 同三郎左衛門尉賴經

越中前司賴業 長門前司時朝

後藤壹岐前司 同太郎左衛門尉

木工權頭親家 同左衛門藏入宗教

縫殿頭師連 守佐美日向前司祐泰

畠山上野三郎 石見前司宗朝

常陸左衛門尉 筑後三郎左衛門尉

城六郎兵衛尉 大隅修理亮久時

信濃左衛門尉 周防五郎左衛門尉

和泉六郎左衛門尉 同七郎左衛門尉

紀伊次郎左衛門尉 梶原太郎左衛門尉

進三郎左衛門尉 加藤左衛門尉景經

小野寺新左衛門尉 甲斐三郎左衛門尉

伊東八郎左衛門尉 佐々木孫四郎左衛門尉

伊賀式部八郎左衛門尉

大見肥後四郎左衛門尉 佐々木加地太郎左衛門尉實經

八日 巳丑 於前濱被撰御的射手左典厩依勞

不被出仕十八人一五度射訖退散云

一番 山城三郎左衛門尉 早河次郎太郎

二番 澁谷新左衛門尉 横地左衛門次郎

三番 伊東與一 富士三郎五郎

四番 松置左衛門四郎 手島弥五郎

五番 伊東新左衛門尉 小沼五郎兵衛尉

六番 小嶋弥五郎 澁谷左衛門四郎

七番 栢間左衛門次郎 本間對馬次郎兵衛尉

八番 落合四郎左衛門尉 神林兵衛三郎

九番 早河六郎 下山兵衛太郎

九日 庚寅天晴 來十二日依可有御弓始被催

撰定之射手來十二日辰刻以前可參勤者左典厩

日來御不列今日御疮瘡出見及晚權律師隆政入

十日 辛卯天晴 為和泉前司行方奉行被定

歲 年廿三

旬御翰之奉行皆是所被撰堪能也

正月 四月 七月 十月

上旬 右馬助清時出羽前司長村

冷泉中持隆茂朝臣

越前七司時廣中務權少輔重時備中守行有

足利大夫判官家次武藏五郎時忠

下野左衛門尉景經

二月 五月 八月 十一月

上旬 刑部少輔時基

二条少將雅有朝臣

後藤壹政前司基政

彈正少弼業時 越後四郎顯時

佐渡大夫判官基隆

左近大夫將監時村 三河前司頼氏

周防左衛門尉忠景

十一月 三月 六月 九月 十二月

二条侍從基長 相摸三郎時輔

佐々木壹岐前司泰經

中旬

中務權大輔教時秋田城介泰盛信濃判官時清

下旬

左近大夫將監公時 木工權頭親家

城四郎左衛門尉時盛

十一月 壬辰 明日御弓始射手之中小嶋弥次

郎家範依申故障彼合手小沼五郎兵衛尉孝幸同

被止之所被縮五番也而今日工藤一郎右衛門尉

光泰計申云就家範之故障被止孝幸為五番者若

猶臨期於故障輩出來者四手不可然右合早河六

郎祐賴於孝幸如元為六番之条可宜歟者仍有沙

汰如然云所彼加波兩人也

十二日 癸巳 有御弓始射手十二人二五度射

一番 太山城三郎左衛門尉親忠

早河次郎太郎祐泰

二番 國橋地左衛門次郎師重

對馬次郎兵衛尉忠泰

三番 澁谷右衛門次郎清重 伊東與一祐賴

四番 小沼五郎兵衛尉孝幸 早河六郎祐賴

五番 松屋左衛門四郎持家

富士三郎貞時

六番 澁谷新左衛門尉朝重 平嶋繁五郎助經

十四日 乙未 自來女一日依可有御祈為左大

臣法印休所可被照出羽入道大空家之由云

十五日 丙申 雨小常降入夜屬晴丑刻月蝕正

見八分御祈加賀法印定清
十七日 戊戌 紅霞纏白雲天氣甚晴戌刻乾巽
有如火光色一方光盛之時一方光薄亦相交厚薄
觀者怪之
十八日 己亥 陰 乾巽亦光如去夜御祈大阿闍
梨休所事道空寮者去比彈正少弼給之畢常陸入
道家者來月二所御參詣御物等沙汰奉行之間今
日被點後藤壹岐前司家云
廿日 辛丑 近日依可有二所御參詣供奉惣人
數如例注進之云
廿三日 甲辰 二所御參詣供奉人等事条々被
經沙汰先日被下御點人數之中多以有申障事等

所謂

武藏前司 越中前司 民部權大輔
中務權大輔 秋田城介 同四郎左衛門尉
佐々木對馬守 縫殿頭 大須賀新左衛門尉
出羽九郎
以上十人雖申所勞之由當出仕之上相扶可
參之由云

是立左衛門太郎 宮内權大輔
佐渡大吏判官 周防五郎左衛門尉
後藤壹岐左衛門尉 甲斐三郎左衛門尉
同五郎左衛門尉 小野寺新左衛門尉
近江左衛門尉 和泉六郎左衛門尉

同七郎左衛門尉

進三郎左衛門尉

大泉九郎

是立左衛門五郎

以上十四人申障之由可尋問其子細之由云

相摸左近大夫持監

信深判官

大隅修理亮

畠山上野三郎

隱岐四郎兵衛尉

小野寺四郎左衛門尉

是立太郎左衛門尉

大須賀新左衛門尉

在國

以上八人者鹿食云不申殿之條同可尋問之

由云

城六郎兵衛尉

食海

子細同前

以上如此

於鹿食事者先被尋問之要不兼及禁制事由各

陳謝云

廿五日 丙午

二所御衆詣事延引於今度者先

可被用奉幣御使也先日至進奉供入者悉以可被

御精進中之由可相觸之旨被仰小侍武藏少卿景

賴傳仰云

二月六日

二日 壬子 小雨降入夜庭上雪白於御所有當

座和哥御會是臨時之儀也然而相州令衆給絆及

曉更

五日 乙卯 自明日依可有御祈為大阿闍梨左

大臣法印休所被點和泉前司行方家云

八日 戊午 天晴十申剋雨降余月於相州常盤御

亭有和歌會一日千首操題被置懸物亭主八十首
在大辨入道真觀百八首前皇后宮大進俊嗣光俊
息誦掃部助範元百首證悟法師良心法師以下候
者十七人辰尅始之哀燭以前終篇則披講範元一
人勤其後有長
九日 巳未天晴 昨日千首和歌為合點被送火
撫障門云六
十日 庚申 朝間雨降被千首合點之後於常盤
御亭更披披講今夜以合點負數候定座次第一座
辨入道第二範元第三亭主第四證悟也亭主以範
元下座之儀可著對座之由被稱之處大撫障門云
以合點負數可守其座次之由治定先訖而非一行

座者頗可為無念歟云其詞未終亭主起座欲披著
于範元之座下于時範元又起座逐電之與即令人
抑留之給又任點數分懸物大撫障門分被置虎皮
上範元熊皮亭主色草以下准之無點之輩備其座
於緣雖羞膳撤箸之間無箸而食之滿座莫不解頤
掃部助範元者去正月為上洛雖申暇依此御會內
乞被留之懸物之中於器具者悉以拜領之

三月小

十日 庚丑天晴 故右京兆義 御願大倉藥師
堂日來加修造今日被遂供養真言道師遠江僧都
公朝
十三日 癸巳 武藤少弼遣奉書於小侍所別當

云二所御精進自來月廿一日可然始也御共并衆
龍人人如先度有御催促可被註進且為食自今月
廿日之比可有憚兼日可被相觸云
十七日 丁酉 最明寺禪室買得信濃國深田卿
今日寄附善光寺所被充置不斷經衆不斷念佛衆
等糧料也備思食來世值遇云
善光寺金堂不斷經衆結番事

合 次第不同

定蓮房律師觀西

理父房阿闍梨重實

蓮明房善曲

大貳阿闍梨覺玄

理乘房海圓

嚴光房證範

嚴蓮房聖尊

覺地房有慈

金蓮房勝賀

河內公俊榮

蓮淨房覺隆

權別當俊範

右守番帳之旨可令勤仕但彼不斷經用途者水田
六町在當國水內郡深田鄉內是則不斷經衆之免
田也然按量彼免田於十二分充人別五段於十二
人畢敢不可違矣次或讓所職或有闕分之時設
有讓得之證文有競望之仁宜依衆議補器量不可
任相傳不可憚有緣是故吹噓之初撰定其器補職
之後不怠其役但器量者不論有智高才黨不退精
勤矣次守過去帳每彼忌日役可奉勤行一持念佛
三昧仍諸衆守此等趣專調誠心不可懈怠之狀如
件

弘長三年三月十七日

沙跡蓮性 在

十八日 戊戌天晴 亥時名越邊燒亡山王堂在
其中失火云

廿一日 壬丑天晴 入夜雨降今日東御方里亭
有造作沙汰對馬前司氏信為願奉行

四月六

一日 庚戌 二所御藥詣供奉人事以先度進奉
散狀被催之云

三日 壬子 後藤壹岐前司二所供奉申障云

七日 丙辰天晴 入夜察堂邊騷動但則靜謐是
群盜十余人隱居地藏堂之間夜行輩等行向其庭
生虜故也

十四日 癸亥 二所御藥詣供奉人之中申子細
之輩事有其沙汰所謂 相摸左近大夫將監申

相州服暇之間非無觸穢之憚歟此上供奉如何
出羽八郎左衛門尉申

子細同前

近江三郎左衛門尉申

依御點進奉之上可令供奉之條雖勿論不許
垂翅之間打梨定有憚歟者

以上執小侍註進武藤少弼景賴披露之處被問食
訖者相州左衛門尉并出羽八郎左衛門尉等者有恩
許近江三郎左衛門尉者可令供奉者又後藤壹岐
前司相構可令供奉之由云

十六日 乙丑天晴 河野四郎通行子息九郎經
通入小侍番帳云和泉前司傳仰於小侍云東御方
小町宿所上棟也但假想云

廿一日 庚午天晴 將軍家二所御精進始御濱
出為浴潮御也為御水干御騎馬也月殊雲客又著
水干其外供奉人等立為馬懼寸直垂還御之時者皆

著淨衣行列云御駕有步行御共

御後云同前

土御門天納言 近衛中將公敦朝臣

越前少司 民部權大輔

遠江右馬助 武藏式部大夫

越後四郎支 駿河五郎支

畠山上野三郎 佐々木壹岐前司

中務權少輔 平厩左衛門尉

女醫博士長宣朝臣 陰陽少允晴弘

武藏守 相摸四郎

兩人後騎等相列如雲霞

廿三日 壬申天晴 御濱出如一昨是中御朝也

廿四日 癸酉 被殿筑前入道宿所是自來四月

一日為御祈大阿闍梨殿僧正居所也

廿六日 乙亥朝雨降將軍家二所御進發

騎馬云大納言

土御門大納言 近衛中將公敦朝臣

武藏守長時 相摸四郎宗政

越前七司時廣

遠江右馬助清時

同四郎政房

民部權大輔時隆

武藏式部大夫朝房

越後四郎顯時

駿河五郎通時

中務權少輔重教

武藏少丞景賴

佐々木壹岐前司泰經

木工權頭親家

後藤壹岐前司基政

島山上野三郎國氏

美作左衛門藏人宗教

女醫博士長宣朝臣

陰陽少允晴弘

步行

伊家四郎左衛門尉景家

土肥四郎左衛門尉

上野三郎左衛門尉

隱岐四郎左衛門尉

近江三郎左衛門尉

周防七郎定賢

是立左衛門五郎遠時

内藤肥後六郎左衛門尉

平賀三郎左衛門尉

小河木工權頭時仲

小河左近將監

五月小

一日 庚辰天晴 將軍家自二所還御而今日錄

會御所自濱部崎當太白方可有御憚歎之由雖有

其沙汰猶還御云

九日 戊子天晴 掃部助範元自京都歸築達密

奏之望云祖父大監物宣賢朝臣年來於事雖不出

望八十四歲之今見孫子當道之堪能為令繼家業

類以内舉云當持人數繁多雖無其關宗明朝臣之

流無人之條不便之由殊有其沙汰被宣下云截人

右衛門權佐經業為奉行云

十七日 丙申天晴 鷺集于左典廐御亭頃之拍

永福寺山飛去被下筵之處文元晴茂晴宗泰房賴

房等為口舌兆之由占申爻武田七郎次郎追彼鷺

射殺之持筭入夜依鷺惟彼行泰山府君有怪白鷺

等祭云

十九日 戊戌天晴 丑刻地震

廿九日 戊申 自來月一日御祈大阿闍梨小殿

法印休所事今度可為前尾洲亭之慶先日失火之

開被點肥前四郎左衛門尉宅云

六月大

二日 庚戌天晴 東鄉方小町亭柱立去四月十

六日假棟今日上梁棟也又壹岐前司基政丹波守

賴景為在京上洛

十二日 辛酉 駿河六郎卒相州左典廐等御輕

服也

十七日 乙丑陰 自昨日冷氣如秋天諸人纏綿

衣

廿三日 辛未 將軍家御上洛事有其沙汰被充

課役於諸國御教書文章一同也西海事者被仰遣

六彼羅云御教書云

御上洛間百姓等所役事段別百文五町列官駄

一疋夫二人可充行至昌者以一町此外不可成

民之煩但有逃散之輩者相觸在所可令勸其役

之狀依仰執達如件

弘長三年六月廿三日

武藏守

相摸守

陸與左近大夫將監殿

廿五日 癸酉天晴 已刻將軍家百首御詠被修
篇昨日未刻被始之則於御前清書掃部助范元候
之

廿六月 甲戌 來八月放生會御樂宮供奉惣人
數記為申下御點自小侍所被付和泉前司行方
越中判官賴業被載此中之與称病府申歸國之暇
今日於御所有帝範御談右義京權大夫茂範朝
臣三河前司教隆等候之又近衛中將公敦朝臣越

前々同時廣樂候云

廿八日 丙子 放生會御樂宮供奉人散狀有御

點左點布衣右隨兵左點端者直垂者被下小侍

之間光泰實俊等迴之云

廿九日 丁丑天晴 小町御亭門上假棟

卅日 戊寅天晴 去廿五日御詠右大辨入道於

御前拜見之奉合點而勝于去年一日百首御歌之

由點者雖申是不通賢愿去年御詠猶宜之由被思

食云

七月小

五日 癸未天晴 將軍家今年中御詠歌數卷之

中抄出三百六十首致清書是為合點可被灌入道

民部卿為家所今日依和泉前司行方孫子卒去事

縫殿頭師連可奉行御前中雜事云

十日 戊子 小兩洒被立御所門禁門今日於前

濱被行風伯祭前大監物宣賢朝臣奉仕之

十三日 辛卯 東御方小町新造亭移徙云今日

供奉人条々有其沙汰其中越中判官時業所勞中

是非指煩然而先日申暇之時不知食其實雖有恩

許常詞候之上者故障不可然之由有沙汰被相催

之虜已歸國云早可遣御教書之由云

此外人々布衣

足立三郎左衛門尉在國

隨矣

足利上總三郎所勞三浦介

阿波四郎左衛門尉 城四郎左衛門尉

隱岐四郎兵衛尉 常陸修理亮

淡路四郎左衛門尉多 風早太郎左衛門尉

已上八人申所勞之由

駿河五郎服 遠江十郎左衛門尉同

至于八月十五日為重服之由申

小田左衛門尉

造鹿嶋社惣奉行也雖供奉有限就余杜事奔

勞似緩彼神事可為何棟哉之由也

阿曾沼小次郎 落馬以後進退未合期以子息五郎令勤仕事

如何之由申

伯耆四郎左衛門尉

所勞難治也以子息五郎清氏今勤仕如何之

由申

江戸七郎太郎

老與病計會於今者著甲難叶進退之由申

足立太郎左衛門尉

御上洛供奉京都大番兩役之間一事有恩許

者早可榮勤之由申

直垂著

佐々木對馬太郎左衛門尉

同壹岐三郎左衛門尉 平賀三郎左衛門尉

已上三人有憚由申

佐々木對馬四郎勞 遠江五郎左衛門尉

依勞加灸之上鹿食之由申

出羽七郎左衛門尉 大須賀六郎左衛門尉

信濃判官次郎左衛門尉勞鹿食

以上三人鹿食之由申

鎌田三郎左衛門尉

勤仕大者訖近曾歸榮之間難治之由申

官人

花渡大夫判官

當時所勞若得少減者可推榮之由申

信濃判官服眼

十六日 甲午陰 右大辨入道真觀歸洛相州以
下諸人有餞送之儀云

十七日 乙未陰 日蝕不正現司天宿曜道等有
相論云

十八日 丙申天晴 將軍家帝範御讀合訖
伏日 戊戌 越中判官放生會供奉事依被遣御

教書獻領狀請文云
廿三日 庚子天晴 將軍家五百首御詠歌并前

右兵衛督教定卿為合點被遣入道民部卿之許範
元清書之

廿七日 甲辰 放生會隨兵今十人可催加之由
被仰下云

廿九日 丁未 兩降將軍家御歌自建長五年至
正嘉元年分被修撰号之初心愚草云

八月六

一日 戊申天晴 於御所被下五首和歌題於人
之二条少將雅有朝臣奉行之

四日 辛亥 放生會供奉人中有鹿食憚之由申
輩事違犯嚴制之条不可然之旨殊被仰下之處有

各陳謝所謂

近江五郎左衛門尉

鹿食禁制事未兼及之上為治所勞食服之由

申

大須賀六郎左衛門尉

所勞不快之間慮食可然由依醫師申忽忘御制事畢之由

信濃次郎左衛門尉

去月上旬之比於或會合之砌取違干他物誤食親之由申

六日 癸丑 雨降將軍家令勸七首歌於人之御

是素暹法印卒去之後有御夢勸之告黃泉有其苦歎之由依被思食驚為被迴滅罪之謀以彼懷紙裡可被書寫經典云御詠被用在兵衛尉行長名字亦於廣御所有臣範御讀合彈正少弼越前公司掃部助範元等候御前

七月 甲寅天晴 於御所有五十首歌合衆議判

云々

八日 乙卯 放生會供奉人等事条々有其沙汰隨兵先被進奉之中河越次郎經重申障又後日重被觸仰之中佐渡太郎左衛門尉鹿食由申此外有子細于催促人々

尾張前司

秋田城介

各申所勞之由

陸奥左近大夫將監

伊勢次郎左衛門尉

各申有憚之由

常陸次郎左衛門尉

服

宮内權大輔

依所勞不快賜鹿食殿之由申

足立三郎左衛門尉

鹿食

佐々木壹岐前司

賜身殿上洛之由甲

新田三河前司兼小山出羽前司

上野前司兼石見前司兼大前

同六郎左衛門尉兼長門前司

筑前三郎左衛門尉兼和泉三郎左衛門尉

小野寺四郎左衛門尉兼田中左衛門尉

伊豆太郎左衛門尉兼肥後次郎左衛門尉

和泉六郎左衛門尉兼鎌田圖書左衛門尉

周防四郎左衛門尉兼鎌田次郎左衛門尉

分自有其沙汰被仰出余之事在國

布衣

秋田城介

依所勞者初被廻散狀之比事殿當出仕之上

者早可催歟

鎌田圖書左衛門尉兼同次郎左衛門尉

既自京都下向云早可催加者

隨兵

阿曾沼小次郎

自身被障令子是勤仕之條何事有哉者

上野太郎左衛門尉

輕服云何事乎可相尋者

直垂者

鎌田三郎左衛門尉

先度故障之趣者自京都下向之間難治云申
狀之趣太自由也早重可相催者

隱岐四郎兵衛尉

先度加隨兵之處故障云書入直垂著散狀猶
可相催候

信濃次郎左衛門尉

先度故障畢可催具隨兵者

對馬四郎

故障何事畢重可催加者

追相催革事者

隨兵

城六郎兵衛尉

加藤左衛門尉

各進奉

下野四郎

長門三郎左衛門尉

各所勞之由載請文言歟

小野寺新左衛門尉

稱在遠江國自留守以上御教書

直垂著

薩摩左衛門尉

善太右衛門尉

出羽十郎

山内三郎左衛門尉

萩原右衛門尉

長雅樂左衛門尉

以上六人進奉

大須賀五郎左衛門尉

所勞之由申

九日 丙辰天晴 御歌合衆議判訖有御連歌今

日左近大夫將監義政朝臣移徙于名越亭亦將軍
家御上洛事有其沙汰來十月三日御進發必燕之
間路次供奉人已下事被定之其記縫殿頭師連持
樂御所召龍元於御前被清書是為被遠京都也
隨兵

相摸三郎時輔

武藏前司子息一人

越前少司時廣

中務權大輔教時

左近大夫將監時村

越後四郎顯時

左近大夫將監公時

右馬助清時

足利上總三郎滿氏

上野介廣經

梶原太郎左衛門尉景經

對馬前司氏信

伊豆太郎左衛門尉實保

薩摩七郎左衛門尉祐能

周防五郎左衛門尉忠景

常陸左衛門尉行清 風早太郎左衛門尉康常

三浦介賴盛 小田左衛門尉時知

大多和左衛門尉義清 色部右衛門尉

加地七郎左衛門尉氏經

和泉三郎左衛門尉行章

遠江三郎左衛門尉泰盛

伊勢次郎左衛門尉行經

出羽跡磨次左衛門尉賴平

遠江十郎左衛門尉賴連 完戶壹岐次郎左衛門尉家氏

武田五郎三郎直門 阿曾沼小次郎光經

足立太郎左衛門尉直元

同三郎右衛門尉元氏 河越次郎經重

長次郎右衛門尉義連 將野新右衛門尉

加賀前司行頼 加藤左衛門尉景經

下野四郎左衛門尉景經 海上弥次郎胤景

武石三郎左衛門尉朝胤

土肥四郎左衛門尉實經

淡路又四郎左衛門尉宗泰

隱岐四郎兵衛尉行長 常陸修理亮

進三郎左衛門尉宗長

佐々木壹岐三郎左衛門尉頼經

善太郎左衛門尉康定

小野寺四郎左衛門尉通時

出羽入道子息一人

和泉六郎左衛門尉景村

同七郎左衛門尉景經

一宮次郎左衛門尉康有

出羽三郎右衛門尉 肥後新左衛門尉景茂

相馬孫五郎左衛門尉胤村

田中右衛門尉知繼 長江四郎左衛門尉

石見次郎左衛門尉 出羽前司子息一人

長門三郎左衛門尉朝景

武部太郎左衛門尉光政

中条出羽四郎左衛門尉

善五郎左衛門尉康家

信濃次郎左衛門尉行宗

周防四郎左衛門尉泰朝

平賀三郎左衛門尉惟忠

小野寺次郎左衛門尉

内藤肥後六郎左衛門尉

内藤豐後三郎左衛門尉

肥後四郎左衛門尉行定

小笠原六郎子息一人

狩野四郎左衛門尉景茂

遠山六郎

氏家左衛門尉

善大左衛門尉

阿波入道子息一人

尾張前司時章

足利大夫判官家氏

佐々木壹岐前司泰經

武藤少外景頼

長江七郎

足立藤内左衛門三郎一

天野肥後三郎左衛門尉

宛戸壹岐左衛門太郎

近江三郎左衛門尉頼重

伊賀次郎左衛門尉久房

平左衛門入道子息一人

可著水干人々

相州

武藏前司朝直

越後守實時

長門前司時朝

武州

尾張前司時章

足利大夫判官家氏

佐々木壹岐前司泰經

武藤少外景頼

佐渡大夫判官基隆

越中判官時業

信濃判官時清

和泉前司行方

御路次間方々奉行人事

一 御出奉行

和泉前司行方

武藤少卿景頼

一 御物具

對馬前司代信

武藤少卿

土肥四郎左衛門尉實經

一 御中持

木工權頭親家四太保進三郎左衛門尉宗長

長次郎左衛門尉義連

一 御宿事

和泉前司行方

備中守行有

式部太郎左衛門尉光政

一 御庭

薩摩七郎左衛門松能式部門外郎

一 御笠

加藤左衛門尉景經 狩野四郎左衛門尉景茂

一 御床子御敷皮

信濃次郎左衛門尉行經

一 掃部所

伊豆太郎左衛門尉實保

一 護持僧

一 醫陰道

已上兩条和泉前司

進物所

壹岐三郎左衛門尉賴經

一 釜殿

梶原太郎左衛門尉景經

一 砂金并紫染衣

和泉前司門式部太郎左衛門尉光政

一 紺染物

武藤少孫左衛門尉行經

一 格勤侍

小野寺左近大夫入道光連

一 御中間竹女

御中間竹女

信濃判官時清

一 御力者

佐渡大夫判官基隆

一 朝夕雜色

一 小侍

一 小舍人

一 侍所

一 國雜色

一 加賀前司朝賴

一 御乘替事

長門前司時朝

越中判官時業

小野寺四郎左衛門尉通時

和泉六郎左衛門尉景村

善五郎左衛門尉康家武石三郎左衛門尉朝胤

阿曾沼小次郎光經

十日 丁巳 御上洛間進物所以下用途事今日

有其沙汰來十月御上洛以前可進濟京都之旨被

仰遣畿内西國等云其御教書被下守護人等云

十一日 戊午雨降 申魁以後屬霽於兩御所御

連歌五十歌 掃部助範元五句為執筆

前右兵衛督教定五句 中務權少輔重教朝臣一

侍從基長三句 遠江前司時直五句

右馬權助清時四句 河内前司親行七句

武藏五郎時忠四句 加賀入道親願一句

左衛門少尉行花二句 左衛門尉行俊一句

左衛門尉忠景四句 御句八句云

十二日 己未 小雨常洒去夜御連歌大夫判官

基隆奉仰合照云

十三日 庚申 放生會供奉人進奉散狀被取整

沙汰訖其中依有故障重被催促之輩或違奉或猶

申子細於故障者以前以後皆恩許云所謂

隨兵

信濃次郎左衛門尉

先度為直垂人數之時辭退今隨兵催促進奉云

上野太郎左衛門尉

祖母他界日數不幾之由申

直垂者

對馬四郎之故障同前

官人

足利大夫判官進奉

信濃判官耗服數日已走過進奉

越中判官

先度平獻頌狀請文猶申所勞之由

十四日 辛酉 自朝天陰雨降雷鳴數聲則南風

烈雨脚跡甚午刻大風拔樹民屋大略無全所御所

西侍顛倒棟梁折等吹拔之亦由比價著岸船數十

艘破損漂沒今夕御息所供奉人事進奉惣入數之

中被下御點云是放生會依可有御樂宮也子刻前

太宰少貳正五位下藤原朝臣為佐法師法名卒八年

十三

十五日 壬戌晴 鶴置放生會將軍家御出如例

相刃武州左典廐等被候迴廊又彈正少弼案時相

摸三郎時輔越後四郎賴時等桑柘棧數八先中御

所御出

供舉人

備中次郎兵衛尉行藤

佐々木重成四郎左衛門尉長經

越中八郎秀頼 大泉九郎長氏

長雅樂左衛門三郎政連

已上六人著直垂帶劔候御車左右

御後十人 布衣下掛

越前少輔時廣

刑部少輔時基

中務推少輔重教

日向司右輔泰久

縫殿頭師連

遠江四郎政房

加賀前司行賴

長次右衛門尉義連

加佐木孫四郎左衛門尉泰信

加地七郎右衛門尉氏經

次將軍家御出供奉人

先陣隨兵十一人

壹岐三郎左衛門尉賴經

加藤左衛門尉景經

筑前四郎左衛門尉行佐

武藤左衛門尉賴泰

伊東八郎左衛門尉祐光

伊勢次郎左衛門尉行經

出羽三郎左衛門尉行資

武藤五郎宣時

城六郎兵衛尉顯盛

相摸七郎宗頼

陸奥十郎忠時

次諸大夫

次殿上人

次公卿

次御車

越中次郎左衛門尉長貞

土肥四郎左衛門尉實經

隱岐四郎兵衛尉行長

武石新左衛門尉長胤

出羽十郎行頼

近江三郎左衛門尉頼重

一宮次郎左衛門尉康有
山田三郎左衛門尉通廉

善太郎右衛門尉康定鎌田三郎右衛門尉義長
薩摩左衛門四郎祐家 伊東六郎左衛門三郎

次御後十五人 布衣下拵

彈正少弼業時

相摸四郎宗政

相摸左近大夫將監時村 遠江右馬助清時

相摸三郎時輔 越後四郎繼時

木工權頭親家 和泉前司行方

越中前司頼業 對馬前司氏清

備中守行有 周防五郎左衛門尉忠景

鎌田次郎左衛門尉行俊 進三郎左衛門尉宗長

善五郎左衛門尉康家

次後陣隨兵十八

佐介越後四郎時治 畠山上野三郎國氏

大須賀新左衛門尉朝氏

越中五郎左衛門尉泰親

平賀三郎左衛門尉惟時

伯耆左衛門五郎清氏

佐々木對馬太郎左衛門尉頼氏

下信濃判官次郎左衛門尉行宗

遠山孫太郎左衛門尉景長

長門左衛門八郎頼秀

官人

佐々木大夫判官家茂 信濃判官時清

十六日 癸亥 天膚快霽御參官同昨日

取競馬探人々

越前七司時廣 相摸左近將監時村

相摸三郎時輔 刑部少輔時基

遠江右馬助清時 同四郎政房

越後四郎頼時

廿五日 壬申天晴 御上洛事依大風諸國稼穀

損亡之間為休弊民煩所被延引也仍今日以其旨

被仰遣六波羅御教書二通被遣之一通者可相觸

京畿御家人事一通左親衛分國葦可存知事也其

狀云

御上洛事依大風御延引之由所被仰下也其間

雖可被進御使且其旨可被相觸御家人等也依

仰執達如件

弘長三年八月廿五日

武藏守

相摸守

陸奥左近大夫將監殿

來十月御上洛所有御延引也且於御京上役辨濟

所々者專令紘返于百姓也以此趣可被下知攝

津若狹國中之狀依仰執達如件

弘長三年八月廿五日

武藏守

相摸守

陸與左近大夫將監殿

今日春日部左衛門三郎泰實被召放美濃國指深庄地頭無是當庄沙汰人地頭有非法之由就訴申六波羅雖下召文泰實不應之仍註進其趣之間及此儀即所被仰遣陸與左近大夫將監辨也又法印源權律師覺乘等於相洲禪室御亭令信讀大般若經依有御病惱也亥刻甘繩有火事北斗堂遣民告冬以災云云
廿六日癸酉陰 依去十四日大風諸國損亡百姓愁歎之間以撫民之儀將軍家御上洛途引之間以遠江十郎左衛門尉預連為御使被申此由於仙洞云

廿七日 甲戌天晴 申刻以後風雨入夜大風由比浦船船沒被死人寄河彼是不可勝計又鎮西乃貢運送船六十一艘於伊豆海同時漂濤云

九月六

三日 庚辰天晴 午刻從五位上行刑部權少輔

大江朝臣政茂卒

十日 丁亥 切錢事有其沙汰近年多以出來之由有其開自今以後者用切錢事可停止之存此旨普可令下知之由被仰左典廐等云其狀云

切錢事

若近年多出來之由有其開於自今以後者用切錢事可停止之存此旨普可令下知之狀依仰執達如

件可... 長三年九月十日 武藏守 相摸守

加賀前司殿

十二日 巳丑 終夜甚雨戌刻雷鳴戌截大將霹
靂蹴裂率都婆其上三尺未為雷火燒蹴裂之聲響
入屋聞者甚多云今日遠江十郎左衛門尉自京都
歸日 庚寅天晴 寅刻以後將軍家雨愾今朝
十三日 庚寅天晴 寅刻以後將軍家雨愾今朝
諸人舉登山而見去夜雷火燒之率都婆非時雷鳴
不輕其慎之中陰陽道等進勘文
十四日 辛卯天晴 依御愾晴宗於所勤仕泰

山府君祭初度勤社也星降臨効驗揭焉也

廿六日 癸卯晴 入道陸奧五郎平實泰名卒
年五十六

十日大

一日 戊申晴 大藏權大輔泰房於御所南延行

天地災變祭是去月十二日大雷御利禱也

八日 乙卯 和泉前司行方此間湯治之處俄以

頰中風野勞云

十日 丁巳 被行評定六波羅檢新等事有其沙

含欲召出彼禊候人佐治入道鳥使節於當座被仰

云強盜人事無地頭權門領以下所々自守護所隨

相觸可被召出之不然者可被追放彼所無其儀者

可補地頭之由兼可被申本所次自地頭補任所之
不被召出強盜人者可被及易彼地頭職之旨相觸
之後可被註申之今日晚景正五位下行石見守大
江朝臣能行卒

十四日 辛酉 今日評定出羽前司入道空始
出仕此一兩年後病籠居

十七日 甲子 明年正月御的始射事有沙汰
可參勤之由被卜左典廐一人御奉書越後守重服
故也

廿五日 壬申晴 今夜中御所出御于武州亭御
外戚太政法印澄圓入藏依御輕服也彼上經者光
明峰寺禪閣御息云

廿六日 癸酉 雨降故與州禪門第三年佛事於
極樂寺被修之以宗觀房為導師

廿七日 甲戌天晴 曉雨降今日貢馬御覽

廿八日 乙亥天晴 將軍家五百首御詠民部卿
入道勳覺加點返上則副一卷狀六義興旨猶可被
幾御沈思之由中條之詠諫云

十一月小

二月 巳卯天晴 左衛門少尉清原真人滿定頓
死 年六十九

八日 乙酉 依州禪堂御勞事被加御祈禱等

迄今日中造立等身十手菩薩之像有供養之儀導
師松殿僧正良基也即以伴僧十二人相共被備畫

夜不斷千手陀羅尼僧正斷五穀伴僧有一日三箇
度行水云次尊家法印於園殿被修延命護摩次陸
與左近將置義收一日之內造立等身藥師像請尊
象法印為導師被逐供養云又尊海法印帶等身藥
師畫像七箇日為令衆籠于三嶋社今晚進發修三
時護摩可信讀大般若經云

九日 丙戌 加賀前司行賴所勞危急之間政所
執事筑前三郎左衛門尉行實可致沙汰之由被仰
付云

十日 丁亥 前加賀守從五位下藤原朝臣行賴
卒年四十四

十三日 庚寅 最明寺禪室御不例已及危急之

間尊家法印修法華護摩松殿僧正於山内亭斷五
穀修行法云

十五日 壬辰 依禪室御祈松殿僧正今日始行
不動護摩又有三時護身云

十六日 癸巳 晴 午刻御息所御著帶御驗者大
納言僧正良基者染法眼伴僧醫師玄番頭丹波長

世朝臣衣布御陰陽權助政茂朝臣隸宿曜師大夫法
眼睛尊等也又尊家衆上云太宰少貳景賴奉行之

戊剋地震
十七日 甲午 霄 被圖繪供養放光佛是依尊家

法印申行至御產之時連日可被奉緝養云
十九日 丙申 相列禪室御病疴穢已及危急仍

有渡御于叡明寺北亭心閑可令臨終給之由思食
立仰尾藤大^{法名}宿坐左衛門尉^{法名}可禁制群參
人之由云

廿日 丁酉 早且渡御北殿偏及御終焉一念昨
日含嚴命之兩人固守其旨制禁人々群衆之間頗
寂寞為御者病六七許葦袒候之外無人所謂

武田五郎三郎 南部次郎
長崎次郎左衛門尉 工藤三郎右衛門尉
尾藤太 宿屋左衛門尉

安東左衛門尉 等也
廿二日 巳亥霖 未尅小町燒亡南風頻吹甚烟
掩御所仍御車二領引立南庭儲御出之儀爰至前

武州亭前火止成刻入道正五位下行相摸守平

臣時頼 ^{御法名道崇} 於最明寺北亭卒去御臨終之

儀著衣袈裟上繩床令坐禪給聊無動搖之氣頌云

業鏡高懸三十七年一槌打碎大道坦然

弘長三年十一月廿二日道崇珍重云

平生之願以武略而輔君施仁儀而撫民然間逢天
意協人望終焉之尅又手結印口唱頌而現即身成
佛瑞相本自權化再來也誰論之哉道俗貴賤成群
奉拜之尾張前司時章丹後守頼章太宰權少貳景
頼隱岐守行代城四郎左衛門尉時盛等依哀傷難
休各除鬚髮其外御家人等出家不逞甄錄皆以彼
正出仕亦武藏前司朝直朝臣落魴之處武州以彈

正少弼類被加禁過之間空素意

廿三日 庚子天晴 酉刻相州禪室葬禮也今日

御息所御產御祈以下事被施行之舉行太宰少貳

景頼出家之間縫殿頭師連奉之亦御驗者大納言

僧正護持僧大貳法印醫師長世朝臣等主去廿二

日晚最明寺禪室病瘧之間或致祈精或廻醫術仍

御產之間事各辭申之

廿四日 辛丑天晴 將軍家有哀傷十首御詠是

依最明寺禪室御事也

廿五日 壬寅 寅刻月犯房昂三星寸房房主

左右馬寮也左典廐殊可有御慎之由司天輩申之

十二月大

九日 乙卯天霽 入夜右少辨經任朝臣為 仙

洞御使下著依最明寺禪室事也

十日 丙辰天霽 源亞相對面 勅使又秋田城

介泰盛同謁申云今日被下御教書於諸國守護人

是依相州禪室御事可遂出家之旨兼以被觸仰之

處有違犯輩之由令風蒲故也

依相摸入道逝去御事家人等不可令出家之由

先日被仰下之處皆御制多以出家云其國御家

人中可被注出家輩之狀依仰執達如件

弘長三年十二月十日

某殿

寅刻若宮大路燒亡始自咒師勾當此至于大學辻

予火等延其中間人家皆以災太宰少貳景賴入道
宅在其中云

十一日 丁巳 相州武州等被謁申 勅使令夕

被始行御祈之間為大阿闍梨安祥寺僧正休所被

點和泉前司行方家也師連奉行也

十三日 巳未天晴 今號右少辨經任朝臣歸洛

在鎌倉僅四箇日云

十六日 壬戌天晴 六波羅陸奧左近大夫將監

時茂朝臣歸洛寂明寺殿御事參向而不可緩被物

沙汰由被仰出候聞揚鞭云

十七日 癸亥晴 成剋在柄社前失火余炎至塔

辻官內權大輔時秀家被定御產所之處同以不免

災

廿四日 庚午天晴 入夜雨降今日評定衆事衆

和州亭御產所并御方違等事其沙汰在陰陽師

等被尋面之異見爰渡御之產所日可為來廿四日

之由兼被定之而今晴茂朝臣申云彼日後日也可

有憚云業昌申云建長六年四月廿四日丙寅沒大

宮院入御之產所無憚云且勘申件例之間相論無

為落居次御產所宮內權大輔家燒失之間被點公

時義政兩大夫將監亭之處晴茂申云當閉坏八座

方有其憚云爰三河前司教隆難申云凡大臣家以

下古勘文不入此事云次御方違被用廿九日而業

昌申云往亡日也可有其憚云業昌以申云非常途

下古勘文不入此事云次御方違被用廿九日而業

御方違為產所之条如何云仍三州令問答晴茂朝
臣之處雖申不可有憚之由相別猶許容可憚之意
見給云

廿八日 甲戌天晴 御息所為御方違入御左近
大夫將監公時朝臣名越亭是依被定御產所也
廿九日 乙亥天晴 辰尅御息所自名越還御午
刻六波羅大夫將監重著姪帶若宮僧正加持之給

新刊吾妻鏡卷第五十一

此言勝肌經并榮俞原經合之穴也勝肌出於至陰

足小指外側端爲井金表脈甲乙丙丁庚辛壬癸流于通谷

在本節前外側陷中爲榮木表脈甲乙丙丁庚辛壬癸注于中骨在

本節之後赤白肉際陷者中爲俞水表脈甲乙丙丁庚辛壬癸過于

京骨在外側大骨之下赤白肉際陷中爲原木表脈甲乙丙丁庚辛壬癸

入于昆侖在外踝之後跟骨之上細脈應手爲經

火表脈甲乙丙丁庚辛壬癸入于亥中照後脈中約紋中動

厥爲合土表脈甲乙丙丁庚辛壬癸此腎是太陽脈

勝肌之穴也